

事業を営む中で、どうにもならない大窮地に陥ることがあります。資金繰り、取引先とのトラブル、社員の離職……。

その瞬間、私たちは何を抛り所にすべきでしょうか。『万人幸福の栞』第十二条には次のように記されています。

こうした一生に二度と出あうことのない大窮地に陥った時こそ、度胸の見せどころである。一切をなげうって、捨ててしまふ。地位も、名誉も、財産も、生命も、このときどういふ結果が生れるであろうか。まことに思いもよらぬ好結果が、突如として現われる。いわゆる奇蹟というのは、こうした瞬間に起る、常識をはるかに超えた現象に名づけたものである。

この言葉を裏づけるような体験をしたのが、昭和四十年代に大手電機メーカーに勤めていたSさんです。

高校卒業後、Sさんは大手電機メーカーに就職しました。持ち前のバイタリテイで頭角を現わし、アメリカの大手コンピュータ会社から依頼されたフロップीडィスクドライブ制作プロジェクトのリーダーに抜擢されました。部下は百二十名、会社の期待を背負った大きなチームの誕生です。

しかし、連日の徹夜と休日返上の業務にもかかわらず、完成には至りません。締め切り当日、ついにタイムアップし、ミッションは失敗しました。部下たちは肩を落とし、涙を流す人もいました。Sさんはリーダーの務めとして、一人ひとりに声をかけ、



捨我に生まれる奇蹟 窮地を突破する純粹倫理の学び

見送った後、深いため息をつきました。この責任をどう取るべきか、その答えは「自ら命を絶つ」ことでした。倉庫からロープを探し、フロアを見渡していたその瞬間、ハッと我に返ります。自分は何をしているんだ。部下を置いて逃げるのか、と思つた、その時、頭の中に突然数式が浮かびました。設計上の課題を解く鍵だと直感し、試しに当てはめると、フロップीडィスクドライブの構造が完璧に完成したのです。数十年後、Sさんは倫理法人会に入会し、『万人幸福の栞』と出合いました。栞の第十二条を読んだとき、当時の心境を思い出したといいます。

失敗直前まで、Sさんの心には「成功すれば出世できる、給料も上がる」という自己利益の思いがありました。しかし、命を絶とうとした瞬間、(部下を置いて逃げてはいけない。部下のために何とかしたい)と心が変わったのです。

この「自分本位の心を捨て、他者への思いやりに転換することこそ、捨我の実践だといえます。『栞』が説くように、一切をなげうったとき、常識を超えた結果、奇蹟が生まれるのです。

経営者もまた、窮地に立たされることがあります。その時こそ、地位や名誉、利益への執着を捨て、社員や社会のために尽くす心に立ち返るべきです。捨我の心が、思いもよらぬ突破口を開くのです。

Sさんの心の変化がそのことを物語っているのではないのでしょうか。